



春日部市長 岩谷 一弘氏

市長のメッセージ

春日部市は、都心から約35km圏内の県東部に位置し、東武スカイツリーライン、東武アーバンパークラインの2路線が春日部駅で結節し、都内への移動もスムーズです。都市機能と自然環境も両立しており暮らしやすいまちです。

現在、春日部駅付近連続立体交差事業、新本庁舎建設をはじめとした各種大規模事業が着実に進んでおり、春日部の未来に希望を抱き、住んでよかった、住み続けたいと思われるまちを目指しております。

はじめに

春日部市は、埼玉県の東部、都心から35km圏に位置し、北を宮代町と杉戸町、西をさいたま市と白岡市、南を越谷市と松伏町、東を千葉県野田市に接している。市域は、東西約11 km、南北約12kmで、面積は66.00km²となっている。

市内には、東武スカイツリーラインと東武アーバンパークラインが交差する春日部駅を中心に8つの駅がある。道路についても、市を国道4号・4号バイパスが南北に縦断するとともに、国道16号が東西に横切っており、首都圏における交通の要衝として賑わいをみせている。

かつて日光街道の粕壁宿として栄えた春日部市は、伝統を受け継ぐ桐たんすや桐箱、押絵羽子板、麦わら帽子などの特産品で有名だが、人気アニメ「クレヨンしんちゃん」の舞台としても全国的に知られている。



特産品の一つである「押絵羽子板」

※シティセールスの推進

全国で少子高齢化が進展するなか、春日部市の人口についても近年は減少傾向にある。市は豊かな地域資源をブラッシュアップし、魅力を再発見することで、新たな「春日部ブランドづくり」を推進するとともに、シティセールスの強化によって、関係人口の創出を図り、将来的な定住人口の増加につなげていこうとしている。

シティセールスの取り組みの合言葉「ホッとする住みごこち +1(プラスワン)」は、春日部ならではの強みとして浮かび上がった「住みやすさ」「暮らしやすさ」を示す「ホッとする住みごこち」に、市民一人ひとりが持つ、春日部の好きなところ「+1(プラスワン)」を加えたものである。

2022年4月15日、市は市内で活躍する「人」の「暮らし方や活動」に焦点を当てて、まちの魅力を発信する新たなシティセールス情報誌「haru+(はるたす)」を発行した。タイトルのharu+は、春日部の「春」と、取り組みの合言葉に使用されている「+1」から名付けられた。

「haru+(はるたす)」は、道の駅や蔵造りの建物、アスレチックのある公園といった市内の様々なスポットを紹介するほか、かすかべ+1(プラスワン)サポーターの方たちに聞いた「あなたにとっての+1」や、市内で活躍している方や移住者の方のインタビュー記事など、春日部の魅力が詰まった素敵な1冊になっている。

春日部市概要

人口(2023年1月1日現在)	231,726人
世帯数(同上)	110,693世帯
平均年齢(2022年1月1日現在)	49.3歳
面積	66.00km ²
製造業事業所数(経済センサス)	198所
製造品出荷額等(同上)	2,100.8億円
卸・小売業事業所数(同上)	1,518店
商品販売額(同上)	3,923.6億円
公共下水道普及率	89.8%
舗装率	84.8%

資料:「令和3年埼玉県統計年鑑」ほか



主な交通機関

- 東武スカイツリーライン 春日部駅、北春日部駅、武里駅、一ノ割駅
- 東武アーバンパークライン 春日部駅、豊春駅、八木崎駅、藤の牛島駅、南桜井駅
- 東北自動車道 岩槻ICから市役所まで約8km

春日部市本庁舎整備事業

現在の市の本庁舎は、1970年に建設されたもので、東日本大震災による被災後に補修工事が行われたものの、耐震性能は不十分なままとなっていた。経年に伴う施設の老朽化や窓口の分散化など市民サービスの低下も懸念されるようになったことから、様々な検討の結果、新たな庁舎の建設が決まった。

新しい庁舎は二つの顔を持つ。一つは行政手続きのエリアとしての顔で、分散していた市民窓口を集約して利便性を高めるとともに、誰もが利用しやすい庁舎となるよう、ユニバーサルデザインが導入される。また、免震構造の採用や非常用発電機の設置などにより、地震や水害などの災害に対処するほか、太陽光発電や雨水の利用などによって、低炭素型の市役所としての機能を備える。

新庁舎のもう一つの顔は、まちとつながり、にぎわいを創出するエリアとしての顔である。市民活動を発表するスペースや交流を深めるための飲食スペース、さまざまなイベントが可能な広場などで構成される「まちのコモンスペース」が設置され、子どもから大人までが集うにぎわいのある空間となる予定だ。

新庁舎が置かれる場所は、2016年に閉院した旧春日部市立病院の跡地で、2021年9月12日に起工式が行われ、現在は順調に工事が進められているところである。2024年1月に予定される新しい本庁舎の開庁が待ち遠しい。

首都圏外郭放水路

首都圏外郭放水路は、首都圏における浸水被害の軽減を目的に作られた治水施設で、春日部市の上金崎から小湊にかけての延長約6.3kmにおよぶ世界最大級の地下放水路である。台風や大雨などで、中川や大落古利根川などが増水した時、越流堤から流入した水を一時的に貯留する機能と、江戸川へ排水する地下河川としての機能を担っている。

この地の周辺は土地が低く、水がたまりやすい地形のため、これまで幾度も浸水被害を受けてきたが、放水路の完成後は被害が大きく軽減した。

流れ込む水の勢いを調整するための調圧水槽は、長さ177m、幅78m、高さ18mの巨大空間で、59本の巨大なコンクリート柱が林立する様子から、「防災地下神殿」とも呼ばれる。洪水時以外は水を取り込んでいないため、予約すれば一般見学が可能で、人気の観光スポットとなっている。(井上博夫)



「防災地下神殿」とも呼ばれる首都圏外郭放水路の調圧水槽